

世阿弥 ゼアミ 1363? ~ 1443?

室町時代初期の能役者、能作者。観阿弥の子で大和猿楽観世座二代目の大夫。幼名藤若。通称三郎。実名元清。法名至翁善芳。子孫に伝えるために著述した『風姿花伝』、『花鏡』をはじめ、高度な能の理論二十数点の伝書を遺した。

世阿弥は、父観阿弥に大きな影響を受けた。観阿弥は、大和猿楽(やまとさるがく)の伝統的特色である幽玄な情調や田楽のもつ面白さ、とくに曲舞(くせまい)のリズムを巧みに取り入れ、大和猿楽を総合的ドラマに創り出した。世阿弥は、こうした観阿弥の創造的な能をさらに高度な芸術に飛躍させ、現在までに伝えられた「井筒」などに代表される「夢幻能」の完成を成し遂げた。「夢幻能」とは、人間の生命の深奥を、詩劇・抽象劇というかたちで舞台に描きあげようとする彼の演劇理論をいう。

伝統的公家文化と新興の武家文化の融合を特徴とした北山文化が形成され始めたなかで、特に將軍足利義満が、猿楽では大和四座の一つである結崎座(ゆうざきざ)の観阿弥・世阿弥父子を寵用したことが以後における能楽発展の契機になった。

Great Books 51 風姿花伝(ふうしかでん)

世阿弥の伝書の中で最も著名な書で、最初の能楽論書である。応永7年(1400)に第3まで成る。最近の世阿弥研究では、『風姿花伝』というタイトルはあとで考えたもので、『花伝』が本来のタイトルだとするのが定着しつつあるようだが、ここでは一般になじみのあるタイトルを採る。

この伝書は7編から構成されている。第1は年来稽古(各年齢に応じた稽古のあり方)、第2は物学(各役に扮する演戯の方法)、第3は問答(実際の上演についての一問一答)、第4は神儀(能の神聖な起源)、第5は奥義(芸能者の生きかた)、第6は花修(能の創作と本質)、第7は別紙口伝(舞台表現の本質論)。書名の由来については、「奥義」のなかに「その風を得て、心より心に伝ふる花なれば、風姿花伝と名づく」からいう。

世阿弥といえば『風姿花伝』以来、必ず引用される言葉として「**花**」と「**幽玄**」の言葉がある。これらはその能についてのキー・コンセプトを構成する。

「花」とは、能の魅力、能役者が観客に与える感動の比喩的表現である。その花をいかに咲かせるか、どんな花を志向すべきか、花を極めるための稽古修行はいかにあるべきか、などを説く。

「幽玄」という言葉で意味した「美」とは、「俗(しょく)なるもの」や「荒々しいもの」と対立する王朝文化的な洗練であり典雅であり、そのようなものとしての花やかさをいう。また、同時代の二条良基らの連歌などに共有されていた「優美」とも重なる。このような「幽玄」の舞台上の実現が、他座との競合にあって観阿弥・世阿弥の大和猿楽の人気をささえた要因でもある。

Key Word 心より心に伝ふる花

そもそも、風姿花伝の条々、大かた、外見の憚(はばかり)、子孫の庭訓のため注(しる)すといえども、ただ望む所の本意とは、当世、この道の輩(ともがら)を見るに、芸のたしなみは疎(おろそ)かにて、非道のみ行じ、たまたま当芸に至る時も、ただ一夕(いっせき)の戯笑(けせう)、一旦の名利に染みて、源を忘れて流れを失ふ事、道すでに廃(すた)る時節かと、これを嘆くのみなり。しかれば、道をたしなみ、芸を重んじる所私なくば、などかその徳を得ざらん。ことさら、この芸、その風を継ぐといへども、自力より出づる振舞あれば、語にも及びがたし。その風を得て、心より心に伝ふる花なれば、風姿花伝と名づく。

(通釈)

まず、これまで述べてきた『風姿花伝』の各項は、本来世間に発表すべきものではなく、芸を受け継いでゆく子孫の教えとして書いたものだが、自分がほんとうに望みたいのは、次に記す点である。

すなわち現今、能の道にたずさわる連中を見ると、芸に対する勉強はなおざりになって、能のためにならないくだらないことばかりに打ち込んでいる。たまたま能を、相当に演じられるようになって、ただ、そ

の場その場の観客に受けることのみ走って、一時的な評判や利得に身をゆだね、芸術としての本質を忘れて、正しい芸の伝統を見失ってしまう者が多い。これは、能がもはや廃れてしまう時期に立ちいたったかと、ひとえに嘆き悲しむばかりである。しかし、能という芸術を愛し、研究を重ね、その芸を尊重するいっぽう、自分を売ろうとするような自己本位な考えを捨てて、正しい稽古を続ければ、かならず多くの人を感動させ、社会的な栄光に浴することになるだろう。

ことに舞台芸術である能は、すぐれた先人の芸をうけ継いでゆくのだといっても、天性の才能ならびに、自分で把握し創造する行為が必要なのであるから、ことばですべてを説明することはできない。先人の芸風を稽古によって人間の心から心へと伝承して得られるのが芸能の花なのだから、そのために書いたこの伝書を『風姿花伝』と名づけたのである。

< 観世寿夫(訳) 『日本の名著 10 世阿弥』 中央公論社 >

◆ *Great Books* 文献案内

- 📖 完訳日本の古典 第47巻 謡曲集2 風姿花伝 / 表章(校注・訳)
小学館 1988年刊 466p <918/19/47> 資料番号 12792081
- 📖 世阿弥芸術論集(新潮日本古典集成) / 田中裕(校注)
新潮社 1976年刊 306p <918J/16/61> 資料番号 12041497
- 📖 日本思想大系 24 世阿弥・禅竹 / 表章, 加藤周一(校注)
岩波書店 1974年刊 582p <081.6/28/24> 資料番号 10150035
- 📖 日本の思想 8 世阿弥集 / 小西甚一(編集)
筑摩書房 1970年刊 402p <121/45/8> 資料番号 10193803
- 📖 日本の名著 10 世阿弥 / 山崎正和(編)
中央公論社 1969年刊 478p <081.6/34/10> 資料番号 12785069
- 📖 日本古典文学大系 65 歌論集 能楽論集 / 高木市之助(監修) 久松潜一, 西尾実(校注)
岩波書店 1961年刊 570p <918/9/65> 資料番号 12038733

◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 演劇人世阿弥(NHKブックス) / 堂本正樹(著)
日本放送出版協会 1991年刊 235p <773.2Z/3> 資料番号 20315461
- 📖 能勢朝次著作集 第5巻 能楽研究2 / 能勢朝次(著)
思文閣出版 1984年刊 554p <910.8/30/5> 資料番号 11923240
- 📖 風姿花伝詳解 / 金井清光(著)
明治書院 1983年刊 586p <773.8R/18> 資料番号 12667853
- 📖 観世寿夫著作集1 世阿弥の世界 / 観世寿夫(著)
平凡社 1980年刊 421p <773.8M/14/1> 資料番号 11780152
* 観世寿夫は、七世観世鍔之丞の長男として生まれた。初シテは7歳の「経正」。戦後を代表する能役者である。終生、世阿弥の伝書を読み続け、現代に生きる「能」を問いつづけた。1978年12月永眠。享年53才。
- 📖 観阿弥と世阿弥(岩波新書) / 戸井田道三(著)
岩波書店 1969年刊 205p <773/18> 資料番号 11779295